

令和2年度 富山高等専門学校 運営諮問会議 議事概要

日 時：令和2年11月10日（火）午後1時30分～午後4時30分

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 富山高等専門学校の現状と課題について

[2] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略，順序不同〕

齋 藤 滋（富山大学長）

下 山 勲（富山県立大学長）

金 谷 真（富山県中学校長会会長）

三 牧 純一郎（富山県商工労働部次長）

*布野 浩久 富山県商工労働部長の代理

高 木 繁 雄（富山商工会議所会頭）

横 田 格（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）

久 和 進（北陸電力株式会社代表取締役会長）

【欠席委員】

伍 嶋 二美男（富山県教育長）

杉 野 太加良（株式会社スギノマシン取締役会長）

佐 伯 則 男（北日本放送株式会社常務取締役）

松 井 秀 樹（立山マシン株式会社総務部長）

土 屋 正 徳（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）

石 崎 大 善（富山高等専門学校技術振興会会長）

稲 積 佐 門（富山高等専門学校同窓会会長）

【富山高等専門学校出席者】

賞 雅 寛 而（校長）
柴 田 博 司（副校長）
水 谷 淳之介（副校長）
高 熊 哲 也（副校長）
高 田 英 治（教務主事）
塚 田 章（教務主事）
富 田 和 宏（事務部長）
新 木 裕 一（総務課長）
松 田 義 弘（管理課長）
新 井 浩（教務課長）
麻 草 歆（学生支援課長）
河 口 早百合（総務課課長補佐）
山 本 徹（総務課課長補佐）
川 口 真 史（総務課係長）
杉 本 美由紀（総務課係長）

議 事

[1]富山高等専門学校の現状と課題について

【賞雅校長説明】

- 高専の特質として、人間としての錬成時期、15歳から専門基礎分野の教育を施している。
高専は全国にまんべんなく設置され、地域産業界と密接に連携している。富山県は海洋県、工業県であるが、産業構造の規模の割には高等教育機関が少ない。県内での高等教育機関としての本校の役割が極めて重要である。
- 本校は、11年前に高度化再編により、富山工業高専と富山商船高専が統合してスーパー高専となった。学生数は約1,400名であり全国でも稀な文系学科があり、県外出身の学生が1割いることや女子学生が多いのも特徴である。
- 高専は大学と同じ2学期制をとっており、授業は1年生から90分である。また、学生寮があるのが特徴で、寮生は360名程度、留学生は6名いる。
- 富山高専は就職率が高く、学生の地元への就職率は全国高専の中では第4位で、地方都

市としてはトップであり、文科省、機構本部から高く評価されている。近年は卒業生の半分以上が就職して、半分以上が進学をしている。

- 高度な研究も実施しており、本校について言えば、科研費の採択は51高専の中で件数、配分額ともにトップクラスで研究業績が高い。
- 富山は工業県でもあり、本校は県内の産業界とのネットワークとして技術振興会があり、会員数も283社となっている。それにより、学生への教育や地元への就職に繋がり、良い関係を築いている。
- 本校の課題として、今までの基礎をどのように応用技術に展開していくのか、新技術の発展、少子高齢化、国際化、地球温暖化への対応、また機構本部から割り当てられた教員削減がある。対応手段として、柔軟でかつ多様なカリキュラムや学事日程の作成、積極的な入試広報、全学科協働によるワンカレッジ化に取り組んでいる。
- 文科省からは、Society5.0に対応した教育改革が求められ、「数理・データサイエンス・AI」を全ての高専生に教育するよう要請されている。今回、51高専の中で富山と旭川の2校がプロジェクトモデル校として選出された。本校としては、機械システム、電気制御システム、電子情報の学科の壁を外し、AI・ロボット学類を形成した。
- 学生の多様化への対応ため、混合クラスの実施、入試広報の強化、また専攻科の拡充を図っている。取り組みが功を奏したのか、現在は入試の推薦倍率が2倍、学力入試は3.3倍となっている。
- 今後は科学技術・海洋分野でイノベーションを創出できるグローバルな人材育成のため、中学生や小学生からは憧れの対象となれるように、在學生は学ぶ喜びを、教職員は就業の喜びを感じ、また卒業生や保護者、地域住民に対しては誇りとなれるような学校となることが目標である。
- 今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、3月10日に時間を短縮して卒業式を実施した。4月からは国内感染者推移を予測、分析しながら、4月3日に遠隔授業の実施を決定した。4月7日から部分登校、遠隔授業の試行を実施し、6月8日から対面授業を80分に短縮し、休憩時間を長くして開始した。残念ながら、各種イベントは中止した。これにより、授業の空白時間が少なくなり、保護者及び学生から高評価をいただいた。また、斎藤学長から、コロナウイルスは4～5℃で活性化すると聞いたので、11月末までに実験実習を終了する予定である。

【質疑応答及び意見交換】

(齋藤議長)

今年は特殊な年で、高専でのコロナ対策に合わせた授業等の取り組みについて、ご報告いただきました。

(下山委員)

高専でのすばらしいご対応をお聞かせいただきありがとうございます。

対面授業の移行開始については、最初から100%だったのか、段階を踏んだのか。

(賞雅校長)

最初は部分登校を実施した。6月1日から県立高校で全面登校を開始されたので、本校でも準備を進め、6月8日から全面的に対面授業を実施した。不安がある学生には、遠隔授業を許可していたが、1週間で全員が揃った。留学生のみが遠隔授業となった。

(齋藤議長)

学生からの評価はどうであったか。

(賞雅校長)

2回のアンケートを実施した。評価は対面、遠隔で半々であった。遠隔授業は2ヶ月だけであったので、遠隔授業の技術については更に向上する必要があると感じた。

(塚田教務主事)

対面授業実施後7月に実施したアンケートでは、6割が対面授業を高評価し、1割が遠隔授業を支持した。4月当初にしたアンケートでは、遠隔授業がいいと言っていたが、結果的には対面授業が評価された。

(齋藤議長)

富山大学では2回アンケートを実施した。そこそこ満足したが半分で、3割が不十分との回答であった。理由は友達と会えない、友達ができない不満があった。

対面授業は必要であり実験実習等を5月から実施したが、一部遠隔で授業を実施したところ、学生からは散々の評価であった。できる教科から対面を始めた。中には遠隔授業によりスライドの内容を全て見直すことができ、予習、復習によかったとの意見もあった。一番の不満が多かったのは、とにかく宿題、レポート量が多いとの意見で、学生への負担が大きかったようである。後学期からは全面对面授業とした。

(下山委員)

富山県立大学でもアンケートを実施した。スライド、画像があり分かりやすいと回答す

る学生がいる一方で、コミュニケーションが取りづらいという意見もあり残念であった。

(金谷委員)

中学校でも遠隔を検討したが、生徒全員と繋がらない、家庭と繋がらないということがあり難しいということで諦めた。また、ネット環境が家庭によりまちまちで、Wi-Fiが繋がらない家もあったため、主に紙ベースでの対応を取った。

教員が動画コンテンツを作成してHPにアップしたり、ケーブルテレビで放映したりして子供たちの刺激になるような手助けになるようなことはしたが、ハード面で遅れている現状があり、それではいけないとのことで、年度内には全生徒にネット環境が整う予定である。

高専を志望する生徒は、しっかりとした目的意識があり5年間勉強したいと思っている。本校は高専に近いので高専に進学する生徒がいるが、県内全体で見ると知らない生徒が多いのではないかと。中学生が進学を考えるときに学校のHPで情報収集していて、特にキャンパスライフや行事が気になるようなので、画像はたくさん載っているようだが、できれば動画をアップしてほしい。また、毎年教員向け説明会を実施していただいているが、まだ高専を知らない教員が多いのが現状であるので、更に情報発信をしていただければ助かります。高専を受験する生徒は目的意識が高いので、上手く育ててほしい。

(齋藤議長)

学校のHPをバージョンアップされるといいですね。

(賞雅校長)

学科紹介や入試についてはしっかりしたつもりであるが、学生生活については足りなかったかもしれない。もう少しHPのバージョンアップを検討します。

(齋藤議長)

中学校と高専との連携、接続はないのか。

(賞雅校長)

毎年、語学系の学生が近隣の中学校に行って英語等の授業を実施している。しかし、今年はコロナ禍のため中止とした。

(齋藤議長)

富山大学では杉谷キャンパスで学長と県内高校生との懇談会を実施した。高校生の意見が聞けてよかったし、学生からも好評であった。

(賞雅校長)

今年度、科学技術振興機構（JST）のプロジェクトでジュニアドクター育成塾が採択された。

(高田教務主事)

ジュニアドクター育成塾の内容は、小中学生が本校に来て実験実習等を実施し、将来の研究者の発掘・育成することを目的としていて、今年度は60名の参加があった。

(三牧委員)

県商工労働部は産学連携として企業との共同研究、インターンシップの状況が気になるのですが、コロナ禍でインターンシップに影響はなかったか。

(賞雅校長)

本校では企業研究会を実施していて、本年度は150社の企業に会社説明をしてもらった。今年はコロナ禍のためオンラインで実施したが、やはり対面での実施とは違い質問等が足りなかったようで、学生は少々物足りなかったようだ。その他に、企業と共同研究をしていて、企業とのコネクションがある。また、本校の特徴として中小企業を中心とした企業との連携を図っていて、技術、人材の供給をしている。しかし、今年度はコロナ禍のため対面でのミーティングができなかったため、少なからず影響が出るのではないかと考えている。出前授業も今年度はできていない状況である。

(三牧委員)

企業としてはコロナ禍のため県外からの学生に抵抗があるようで、学生さんには県内の就職について相談させていただきたい。

コロナ禍でのデジタル化、オンライン化で県外の他高専との連携はどうなっているのか。

(賞雅校長)

高専の入学試験は、全国51高専が同じ問題で実施している。授業については個々の高専に任されているが、基礎科目については共通するところがあり、デジタルコンテンツが集積されたので近隣の高専との共有を計画している。アフターコロナに対応したシステムを構築しているところである。

(久和委員)

産業界としては、企業との連携は非常に有難いので引き続き実施していただき、今後も維持して行ってほしい。

コロナ禍ではあるが、対面授業を重視してやってほしい。リモートばかりではどの大学

でも同じになり大学が淘汰される話になっていくことも考えられるので、そこを意識してやってほしい。

デジタルトランスフォーメーションへの取り組みについてアンケート調査を実施したが、未だ、AI、Iotについて対応はしてなくて、コロナ禍のためリモートワーク、ペーパーレスに取り組んでいることが多い。今後は、付加価値を高めていくためにデジタル改革が必要になってくるので、是非学生さんにはその分野に取り組んでいただきたい。先程、「数理・データサイエンス・AI」のプロジェクトに採択されたと言われたが、どういった内容なのか。また、富山県は高等教育機関が少ないと言われたが、これから益々少子化になる中で大学の数が少ないのはそんなにハンディにならないと考える。逆に地元から離れた場所で充実した学生生活を送り、いろんな地域の学生と交流することは人のネットワークが広がっていいと思っている。しかし、都会に出ると学生が地元に戻らない。特に女子学生は戻らないのだが、高専の女子学生はどこに就職しているのか。学生にアンケートを取ると、北陸にどんな会社があるか分かっていない。富山県は製造業が非常に多いので是非女性に志望してほしい。以前製造業は男性の職場のような意識があったが、コンピュータの導入等により力仕事は少なくなってきているので、女子学生にも広い視野でいろんな分野での仕事を志望してほしい。今後は、特に女子学生が希望する仕事を作っていくないと、富山に戻ってこないと考える。

(賞雅校長)

本校は各企業とのインターンシップや出前授業をしているので学生は富山の企業のこととはよく知っていると思う。本科卒業生の5割が就職して、5割が進学しているが、進学した学生も富山に帰ってくる率が高い。本校の女子学生は主に地元の県庁、市、薬学系企業等に就職しているが、製造業についても男女区別なく就職の説明をしている。

(塚田教務主事)

「数理・データサイエンス・AI」のプロジェクト内容について説明します。1年生全員に数理データサイエンスを全学科共通で受講させている。4年生には各専門にAIの素養を身に付けさせ、5年生ではビジネス的感覚も持たせるための取り組みを全学科共通で実施する予定としています。教材については、数理・データサイエンス教育拠点コンソーシアムで実施しているメニューを用意している。15歳からデータサイエンスを取り入れ、文系である国際ビジネス学科の学生にも同じように実施している。女子学生の就職先については、分野関係なく性別を意識せず就職指導をしている。

(齋藤議長)

富山大学でも1年生に数理・データサイエンスを受講させている。現在はAI教育プログラムを6学部を受講させていて、卒業までには全ての学生が学べるようにした。文系の学生であってもデータサイエンスを共通カリキュラムとして教えている。

新規採用の教員はデータサイエンスに特化した教員を採用するようにしている。

(賞雅校長)

若くて、データサイエンスに知識が深い先生は非常に貴重である。若い先生が積極的に取り組んでいただけることは非常にありがたい。

(齋藤議長)

本学では来年度から寄附講座を設置し、客員教員を採用予定であるが、教授クラスで年棒は1,000万円程度が必要となる。学長の要望として、いろんな地域から、現場を経験した若い先生を採用するように言っている。データサイエンスは若い学問なため、教員が使いこなすことは大変であり、教員への教育が必要で若い先生が適していると思う。学生は予想以上の活躍をするので面白いと考える。富大と高専と県立大が連携してデータサイエンス教育に取り組んでいけたらと考えている。

(横田委員)

学問は教える側、教わる側があり、知識は学ぶということと考えることがありそのバランスが難しい。銀行内には色んな担当部署があるが、社会の変化にどうやって対応していくのか、人材の育成が課題である。教えることなのか、自らやらせることなのか、教えようとした場合に教えられる人材が不足しているのが状況である。

学校教育において、次の2点について教えてほしい。

① 学ぶのか、教えるのか、自分で考えるのか、そのポイントは年代で変わるのか。

日本財団が、18歳を対象に毎年アンケートを実施している。その中で、「コロナ後日本は変わるべきか」と質問を出したところ、6割の人が変わるべきと回答したそうである。また、どういう風に変わるべきかとの問いには、自分で考えるべき、自分の意志で行動すべきと回答している。18歳にもなると立派な見識を持っている。高専は年齢の幅があるので、この辺の分かれ目を意識しているのか。

② AI、数理データ、人工知能の教育を1年生から5年生まで実施されるとのことだが、教育パターンで標準的なものがあるのか。レベルに合わせて実施するのか。

(賞雅校長)

質問についてお答えします。

① 基礎知識は変わらないものであるが、応用知識は世の中の変化と共に変わる。

例えて言うならば、山の登り方を覚えてほしいと言っている。山に登るのに、地図や天候など知識が必要で、身に付けた知識によりどの山に登るかを判断し、それが出来ると次の山に挑戦する。どんな状況になっても対応できる能力を15歳から20歳までに身に付けさせることを高専のポリシーとしている。

② AI教育については、新しいことはしていない。他大学でやっていることを本校にも取り入れる形で実施している。ただ、他高専と違うところは、本校は国際ビジネス学科があるのでMOTも教育している。工学系は課題を与えられて実施することは得意としているが、その課題が正しいかどうかはマネジメント能力が必要となってくる。そのため、AI・データサイエンスをやる場合に、課題解決型教育に異分野の横断的教育を取り入れるというプロジェクトで本校が採択された。

(塚田教務主事)

①については、学生自身が考えている。自分の進路は自分で考えて選んでいる。卒業生の5割が進学しているが、成績上位者が進学している訳ではなく、大学に行く目的があって大学に進学している。高専は大学受験がなく5年間の期間があるので、考える時間もたっぷりあり気付くきっかけがあるようである。気付ける確率が高いと考える。

②のAIについては、学生に教えながら教員も学んでいくことになると思っている。

(齋藤議長)

昨年の入学式で話したことだが、大学と高校の違いは、高校は授業だが大学は講義である。授業は「業を授ける」と書くように、必要最低限の知識を学ぶことを言い、受け身の要素が多い。一方で講義の「講」は、仏教の講和を聴くために人々が集まる場という意味があり、「義」は「羊」と「我」から成り立っていて、大きな羊が「美」という漢字の成り立ちにもなっていて、つまり「義」という字は自分を美しくするという意味もあり、能動的に自らの意志で自分を美しく高めることであると。また、今年の1年生からは学部横断的授業を実施しているので、総合大学のメリットを生かすことができたと思っている。学生からは非常に好評である。高専はそういった授業を早い段階から実施しているので人間としての成長が早いと感じる。社会で役に立つのは自分で考えることであると考えます。

(下山委員)

学ぶとは真似ることであると言っているが、学ぶにどっぷり軸足を据えている学生は卒業で文献などに答えを見つけに行こうとするがそこに答えはない。そういう学生はその時点で挫折することが多い。自分の頭でよく考えろと言っている。人生のどこかでギアチェンジすることになるが、土台としての基礎知識がないと前には進めない。課題解決では、答えがないものを見つけることが重要であり、教員と共に答えを導き出すことが大学のいいところであり課題解決になっている。先行して成功体験すると、他の課題に対しても社会に出ても新たな課題に恐れなくてチャレンジすることができるようになる。それが、高等教育であると考えている。

(横田委員)

大企業では部署毎でのやり方があるが、同じロジックの人間が全国各地に居て連携する時代ではないかと考える。インフラとしての知識、人工知能を読み解く力は身に付けなければならないが、人間としてのパーツとパーツはいろんな組み合わせがあって、個別の素材を繋げることが重要であり、一人一人が独立した発想を持つことが大事であると考える。これからの時代は地域を越えて最先端に行くことが重要と考え、企業単位ではなく、新しい産業を富山で起業する、今がチャンスなのではないかと思う。

(高木委員)

大学で評議員、理事をさせていただいているが、最近の大学では、学生ベンチャーのテストランをさせていることが多いが、高専でもどうか。大学で授業も持っているが、90分の中で45分しか講義をしない。残りの45分で学生どうし考えさせるべく、グループディスカッションをさせている。現在はコロナ禍でオンライン授業が多いが、対面授業も大事であり、私は大きい部屋で少人数でのゼミスタイルでやっている。

富山高専はチャンスである。全国にある高専のネットワークを生かし、オンラインでいい先生の授業を受けさせるのがいいのではないかと考える。学生のレベルが上がる。コロナ禍でのピンチがチャンスになる。

(賞雅校長)

本校では学生からの評判がよかった遠隔授業について、FD研修会を開催し担当した教員から取り組み方法等について報告があった。また、本校に入学してくる学生はマニアックなタイプが多く、大企業向けというより起業する素養があり、実際に中小企業の社長になっている卒業生が多い。起業するには工学的知識だけでなく経営的センスが必要

となってくるので、AI・データサイエンスの中にMOTを入れることとした。

(高田教務主事)

ディスカッション型授業という点では、それぞれの授業で工夫しながらやっているが、1年生全員を対象に産学連携教育ということで、Ti-TEAMを実施している。企業の協力により、1年生を5～6人のチームに分けて、企業の取り組みのいいところをインタビューして纏めさせ、1年生から地元企業を学ばせ就職先を考えるときの参考とさせている。

(高木委員)

自分の学生時代は、今にして思えば企業経営の真似事を実践していた。例えば、音楽祭を開催するために、バンドとの交渉、宿泊施設の準備、チケット販売等自分達で行動していた。何が大事か。習う、考える、やってみることが社会に出ていい経験になっていると感じる。高専でも今やっていることに積み上げて、経験を踏ませることができたらいいのではないか。自分たちが持っている技術でものを作り上げ、失敗を恐れずにやってみることが大事ではないか。

(賞雅校長)

最近では失敗すると学生が挫折する。冒険させることはいいことだと思うが難しい。昔のように直ぐに留年させるわけにはいかず、大事に育てないといけない。1割程度の学生がついていけないが、カリキュラムの見直し等をしてケアをしている。現在は1～2%の学生が留年しているが、それも少なくしなければならない。教育現場も難しくなっている。

(久和委員)

留年まではいかなくても、小さな失敗をたくさんすることがいい。コロナ禍ではあるが障害と立ち向かえるような強い学生を育てることが大事である。

(齋藤議長)

コロナ禍で心の問題はなかったか。富山大学は段々と相談者が増えている。前期は遠隔と対面の混在した授業をしたが、後期は全部対面授業とした。途端に相談者が増えた。遠隔授業にするとついていけない学生がいて、対面授業だとメンタルで相談する学生が増えた。対策として、学長が全てのキャンパスを回り学生との対話を実施した。

(賞雅校長)

本校では4月から6月初めまで遠隔授業を実施した。同時並行でMicrosoft365のネット

ワークを使って保護者会を実施し、学生のケアをしてきた。メンタル面で相談が増えた傾向はなく、また期末試験は昨年より成績がアップした。特段、影響がなかった。

(高田教務主事)

6月から対面授業を始めたが、遠隔授業の時でも朝のHR時間を30～40分と長くして時間を割き健康確認を実施した。また、高専は5年生まで担任がいるため、学生は教員と繋がっていると感じてくれたのではないかと思っている。

(齋藤議長)

文系の学生の就職率が悪く、また内定が遅れている。留年したいと言ってくる学生がいる。今の経済状況だと企業側の採用がストップした感があり、就職浪人しても、来年度以降はもっと就職率が悪いと考える。高専の状況はどうか。

(賞雅校長)

今のところ高専は大きな問題はない。内定は時期がずれ込んでいて、採用通知が遅れている。

(塚田教務主事)

文系は多少の影響が出ている。大学の編入学が11月から12月で、40名中7割が進学を希望しているのでこれからである。後は公務員試験の第1審査に合格している学生が多いが、内定が遅れているように感じる。

(高田教務主事)

工学系は就職がほぼ100%決まっていて問題がない。編入学は時期が遅れているようである。

(久和委員)

企業は採用人数を減らしているようである。しかし、就職率が下がると県内で就職する学生が増える傾向があるようで、県内の企業側としては採用し易い状況になった感じである。

(高木委員)

採用は年次によってヴィンテージの層というのがあって、景気が悪いと地方ではいい人材が揃う傾向がある。当行の採用については今年はいいい学生が来ていると聞いている。近年はどこの企業でも大量採用をしていたが、コロナ禍で採用を減らしているようだが、学生は本当の意味で自分が何をしたいのか考えるいい機会となったのではないか。

(横田委員)

当行は富山に特化した銀行で、採用人数は減らした。メガバンクは採用後の派遣先がまちまちで学生には不安があるようだ。地元志向が強い学生は収まる場所に収まるが、大企業に就職ができず地元に戻ってきた学生は、思うようにいかず就職が難しいようだ。コロナ禍で今後数年は学生にとっては厳しい状況になるようだ。

(賞雅校長)

就職難とはいえ、オイルショック、リーマンショックの時に比べたらはるかに就職率がいいので、本校について言えば基本的には問題がない。

(三牧委員)

リーマンショックの時は非常に就職が厳しかった。しかし、ある意味この世代はどの組織にいても柔軟に対応でき、上手く渡り歩く人材が多いように感じる。富山のように起業した人材も多い。一方で崩れるとずっと正社員になれない人も多く、上下が大きく分かれた世代である。コロナ禍でその辺をうまくフォローすれば、地方はいい人材を採用するチャンスである。県としてもしっかりと支援していきたい。また、今の危機は新しいビジネスを作ればまだ需要があるので、リーマンショックの時に比べれば、いい状況にある。

(齋藤議長)

教員の削減はどうか。

(賞雅校長)

統合後教員を減らすように機構本部から要請があり、ここ11年間で20名程度の教員を減らした。しかし、それでも他高専に比べると教員数が多いので、今後10年計画で採用を抑制しながら教員の人数を調整することとして、目途は立った。

(齋藤議長)

富山大学は人員削減をした結果、若手教員が少なくなり新陳代謝が悪くなった。先の講演で講師が言っていたことだが、この5年間で世の中がすっかり変わり、今後5年が勝負であると言われた。本当に実感する。人件費削減で教員を減らしたら、教育の新しいことができず、そのジレンマがある。

(賞雅校長)

高専は大学より厳しくない。教員削減の目標は示されているが、プロジェクト等により特任教員を採用することができ、教員枠を確保している。新しいものを創る時に、柔軟

な若手教員は大事であり、また、高専は学生の年齢が15歳からなのでジェネレーションの近い教員が必要である。しかし、昔に比べれば若手の層が少なくなっているので確保が必要で、本校での一番の課題となっている。

(齋藤議長)

富山大学ではデータサイエンス等重点化する教科を担当する教員が足りず、学部教授会で諮ったがなかなか採用に至らなかったため、学部単位でしていた人事を全学ですることとして、その部分を強化した。富山高専での校長のガバナンスはどうか。

(賞雅校長)

基本的に高専校長のガバナンスは強い。本校では教職員とのディスカッションを熱心に行うようにして、最終判断は校長としている。

(齋藤議長)

文科省から、参考としながら学生による授業評価をするよう依頼がきているが、高専はどうか。

(賞雅校長)

特に依頼はきていないが、毎年実施している。FD研修として授業をよくしたいという観点で、学生からの評価の高かった先生の授業を報告している。

(高田教務主事)

関連して、機構本部の方針により全高専が同じ問題で試験をする、C B T (Computer Based Testing) を実施している。機構本部では評価といった要素では使用しないと言っているが、実質教員評価に繋がっているかもしれません。

(齋藤議長)

C B T 試験は全国の医学部でも実施していて、これに合格しないと臨床実習に入れない。4年生から5年生に上がれない制度となっている。

皆さんから闊達なご意見をいただきありがとうございました。これにて、運営諮問会議の協議を終了します。引き続き、学生さんによる「富山高専について」プレゼンテーションをお願いします。

[2]その他

【電気制御システム工学科4年 中澤晟侑 学生会会長】

○「富山高専について思う」

【電気制御システム工学科5年 田村太一 メカテック部部長】

○「ロボコンと共に ～高専での5年間～」

(齋藤議長)

以上を持ちまして、富山高等専門学校運営諮問会議を終了します。皆さんからの建設的なご意見を今後の富山高専の発展に役立てていただき、ご活躍を期待しています。

[閉会 午後4時30分]